

[原著論文]

## 学士課程教育における初年次教育の役割を再考

### ～問われる学士学位の国際的通用性～

社会福祉学科 真殿 仁美

#### 【はじめに】

2010年度の文部科学省「学校基本調査」結果によると、2010年3月の高等学校卒業者の大学等<sup>1</sup>への現役進学率は54.4%で過去最高であったという。大学学部への進学率は50.9%で前年度比0.7ポイントの上昇で、こちらも過去最高となった。このような高い進学率に並行して、入学者の学習意欲や目的意識、規範意識の多様化がすすんでいる。今日では、受け入れる大学側において、これら多様な学生に対して“高校から大学の転換期あるいは移行期を支援”（河合塾2010）することを目的に、初年次教育が実施されている。

今日、初年次教育への関心は高い。すでに全国の大学・短大等の8割以上において取り入れられているという。本稿では大学における初年次教育に注目し、学士課程教育において初年次教育がどのように目されているのか、また、学士課程教育における初年次教育の役割は何か、さらには他大学においてこの初年次教育はどのように取り組まれているのかなど、学士課程教育の枠組みの中で初年次教育について考えたい。

**キーワード：学士課程教育、初年次教育、大学のユニバーサル化、学士学位の国際的通用性**

#### I. 先行研究の整理および本稿のねらい

近年、初年次教育に関する研究は盛んである。研究の視点は、アメリカのFirst Year Experienceでの内容や初年次教育の重要性や概念の整理（山田2009）、各大学における実践の紹介、特定の学部・学科での実践及びその効果（熊野他2011）、また、初年次教育の普及を経て、次に大学が目指すもの（千葉2009）、さらには発達障害学生の支援として初年次教育を活用する研究（片岡2009）など、さまざまな視点から行なわれている。これらのことから、大学における初年次教育への関心の高さを窺うことができる。

本稿ではこれら先行研究で示された初年次教育の重要性を、学士課程教育全体から捉え、改めて初年次教育の意義について考察を行なう。その際、近年、学士課程教育において国際的に通用する人材の育成が強調されている点を踏まえ、初年次教育が期待される役割についても併せて探っていく。加えて、他大学における初年次教育への取り組みを2つの調査をもとに検証する。この他大学の実践を検証することで、本学社会福祉学科での初年次教育の方向性を探る手がかりを得たいと考えている。

#### II. 大学のユニバーサル化とそれへの対応

アメリカの高等教育研究者M.トロウによると、該当

年齢人口に占める大学在籍率が50%を超えると、大学はマス型からユニバーサル・アクセス型へ移行するという。このユニバーサル・アクセス型に達した高等教育機関では、極度の多様性、共通の一定水準の喪失、スタンダードそのものの考え方が疑問視されるといった特色が指摘されている。

日本において大学進学率が大幅に伸び始めたのは、1990年代半ば以降のことである。2000年代前半には若干低下するものの、2007年は50%台に突入した（表II-1）。高い進学率と同時に、学生の学力や学習意欲の多様化が表面化し、中には自らが積極的に進学を選択したのではない上に、進学の動機も興味もない「不本意入学者」の存在（濱名・川嶋2009）も指摘されるようになってきた。ユニバーサル化した大学は、これまでの想定を凌ぐ多様な学生への対応が求められるようになったのである。そこで注目されるようになったのが初年次教育である。

#### III. 初年次教育とはなにか

##### 1. 中央教育審議会報告書に見る初年次教育

「初年次教育」という語は、2007年に中央教育審議会関係の文書の中で初めて使われたという（濱名2008）。その文書とは、中央教育審議会大学分科会制度・教育部会が、同部会に置いた小委員会におい

表Ⅱ-1 高等学校卒業者の大学等進学\*率の推移 比率単位：%

年度	1992	1997	1999	2001	2002	2003	2005	2007	2009	2010
比率	32.7	40.7	44.2	45.1	44.8	44.6	47.3	51.2	53.9	54.4

注：大学等進学\*とは、大学の学部・通信教育部・別科、短期大学の本科・通信教育部・別科、高等学校等への専攻科への進学を指す。

出典：文部科学省，学校基本調査 調査結果の概要（初等中等教育機関，専修学校・各種学校），各年。

て審議経過をまとめた審議経過報告である。この報告の用語解説において初年次教育について次のような解説が加えられた。

高等学校から円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主として大学新生を対象につくられた総合教育プログラム。高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり、新生に最初に提供されることを強く意識されたもので、1970年代にアメリカで始められ、国際的には「First Year Experience(初年次体験)」と呼ばれている。具体的な内容としては、(大学における学習スキルも含めた)学問的・知的能力の発達、人間関係の確立と維持、アイデンティティの発達、キャリアと人生設計、肉体的・精神的健康の保持、人生観の確立など、大学における教育上の目標と学生の個人的目標の両者の実現を目指したものになっている。

この中央教育審議会の報告・解説から分かるように、初年次教育は多様な新生の大学生活のは

じまりを総合的にサポートすることをねらいとして展開される教育プログラムを指している。プログラムは、学習スキルからキャリア、人生設計など多岐にわたる。

## 2. 初年次教育の普及

文部科学省が2009年12月から2010年1月にかけて行なった調査によると、初年次教育を実施している大学は595の大学にのぼり、82%に達しているという（文部科学省2010）。初年次教育を取り入れている大学は2006年度には501校であったが、翌年の2007年度には70校近く増えている。また、国公立大学の別で見ると、国立大学における初年次教育の実施率が最も高く90%近くに達している。公立大学では、全体の6割にとどまり国公立大学の中でも初年次教育の導入が最も低いことが分かる（表Ⅲ-1）。

## Ⅳ. 学士課程教育と初年次教育 ～国際的通用性を視野に入れた学士課程教育

初年次教育が全国の8割以上の大学で取り入れ

表Ⅲ-1 初年次教育を取り入れている大学（学部）

単位：校

	国立	公立	私立	合計
2006年度	67	45	389	501
学校総数	87	89	568	744
2007年度	74	54	442	570
学校総数	87	89	580	756
2008年度	77	54	464	595
学校総数	86	90	589	765

注) 2008年度調査は、実際には通信制大学、短期大学、および2008年度に学生募集を停止した大学を除いた全国の国公立大学747校を対象に行われている。

出典：文部科学省，学校基本調査 年次統計，大学における教育内容等の改革状況について（平成20年度）

られるようになっている今日、学士課程教育において初年次教育はどのような位置づけにあるのだろうか。二つの関係性を考察する前に、まずは学士課程教育について整理しておこう。

## 1. 国際的に通用する学士力を目指して ～東アジア地域を見据えた人材の育成

本稿において学士課程、学士課程教育を多用してきたが、そもそも学士課程教育とはなにか。この用語をめぐるのは、これまでに中央教育審議会の大学分科会において議論されてきた。2003年の大学分科会制度部会では、学士課程という用語例が現行法上ないことが指摘されている。その上で、用語の概念を確立することが重要との見解が示された<sup>2</sup>。その後、2005年に出された答申「我が国の高等教育の将来像」において、将来の大学の姿として、「現行の学部や学科、研究科といった組織に着目した整理ではなく、教育の充実の観点から、学部・大学院を通じて学士、修士、博士、専門職学位のような学位を与える課程（プログラム）を中心とした考え方に再整理していく必要がある」、との指摘がなされた。この2005年の答申を踏まえて、2008年には「学士課程教育の構築に向けて」（以下、「2008年答申」）と題された答申が中央教育審議会より出された。

「2008年答申」の用語解説では、さらに踏み込んだ見解が示され、学士の学位は国際的通用性のある大学教育課程の修了にかかわる知識や能力の証明として与えられるものであることが併せて説明された。学士課程教育が目指す基本的な方向として、学位の国際的通用性を念頭に、豊かな人間性や課題探求能力等の育成に配慮した教育課程を編成し、自立した21世紀型市民<sup>3</sup>を育てることを挙げている。

また、2010年には中央教育審議会の大学グローバル化検討ワーキンググループより、東アジア地域を見据えたグローバル人材の育成に言及した報告書が出されている。この報告書では、この先、東アジア地域内で社会システムがより緊密に関係し合いながら発展することを見据え、学士課程において東アジアへ深い理解を促す教育プログラムの必要性を説いている。その上で、国際的に通用する専門知識とともに、グローバルなコミュ

ニケーション・スキルを有した人材の育成を求めている。

以上のことから今日、学士課程教育はグローバルな知識基盤社会において、中でも東アジア地域における連携強化を十分に理解し、学んだ知識を活用し豊かな想像力、柔軟に対応できる力を身につけ、直面する課題へ取り組むことができる人材<sup>4</sup>を育成することが求められているといえるだろう。

## 2. 学士課程教育における初年次教育

次に、上述のように、国際的に通用する人材の育成が求められている学士課程教育において、初年次教育はどのような位置づけにあるのか考えてみよう。

初年次教育は学士課程教育のはじまりとして、入学者の大学生活の出だしをサポートし、大学の教育上の目標と学生による目標、双方を実現することを目指して取り組まれる教育プログラムである。先の「2008年答申」では、初年次教育は「新たな学校段階への移行支援」として、また「初年次学生が大学生になることを支援するプログラム」として、その重要性が指摘されている。つまり、初年次教育は学士課程教育における「最初の一步」と目されていることが分かる。この「最初の一步」となる初年次教育は、初年次を経てその後の学士課程において、目的を達成へと導く「成功の基盤」（西垣他2008）とも位置づけられている。

これらのことから、学士課程教育における初年次教育は、大学環境への円滑な移行を経て、目標の到達に必要な積極的な取り組み姿勢や、柔軟な考えを培う場として機能することが求められていると言えるだろう。これら積極的な取り組み姿勢や柔軟な考えは、最終的には学士課程において専門的な知識を身につけ、国際的に通用する学士力を備えた人材を育成する基礎にもつながってくる。そのためにも、初年次教育が手掛ける教育プログラムはこれらを強く意識して、文化理解や異文化交流なども含め検討していく必要があるだろう。

次節では、初年次教育においてどのような具体的取り組みが展開されているのか詳しくみていこう。

## V. 初年次教育で展開されている内容

既に述べたとおり、初年次教育は多様な新入生の大学生活のはじまりを総合的にサポートすることをねらいとして展開される教育プログラムである。この初年次教育には型どおりの内容や手法が存在するわけではない。大学の状況や必要性に応じて変化するため、内容や方法自体の標準化は困難であるといわれている（濱名・川嶋2009）。ただ、先に指摘したように、初年次教育は大学環境への円滑な移行を実現し、国際的に通用する学士力を備えた人材を育てる基盤になることから、体系的な教育プログラムが必要であることは言うまでもない。

本節では、二つの調査結果をもとに、各大学における初年次教育の内容について分析を試みる。

### 1. 文部科学省調査結果に見る初年次教育の具体的内容

先に挙げた文部科学省が実施した調査結果によると、各大学で取り組まれている初年次教育で最

も多いのはアカデミックスキルの習得を目指すプログラムであることが分かる。その内容として、レポートや論文の書き方などの文章作法、プレゼンテーションなどの口頭発表の技術の習得などが挙げられる。中でも、レポートや論文の書き方など文章作法を身につける教育プログラムは、初年次教育を行なう大学の85%が取り入れていることが調査結果から明らかになっている。一方で、取り組みが最も少ないのはメンタルヘルス等、精神的、肉体的健康の保持に関するプログラムであった（表V-1）。精神や肉体的健康を維持することは、学生の学習意欲や日常生活にも大きく関わってくる<sup>5</sup>ことから、この分野を初年次の教育プログラムの中でどのように盛り込むか今後の課題になるだろう。

### 2. 河合塾調査結果に見る初年次教育の具体的内容

次に、2009年度に河合塾が全国の国公立大のすべての学部を対象に行なった初年次教育調査の結果を見てみよう。調査は約2000ある学部の学部長を対象にアンケートを送り、その内1092

表V-1 初年次教育で取り組まれている内容

項 目	学校数
レポートや論文の書き方などの文章作法	505
プレゼンテーション、ディスカッション等の口頭発表の技法	449
学問や大学教育全般に対する動機づけ	447
図書館の利用、文献検索の方法を身につける	417
情報収集や資料整理の方法を身につける	398
将来の職業生活・進路選択に対する動機づけ	360
コンピューターを用いた情報処理や通信の基礎技術を身につける	341
ノートの取り方	316
論理的思考や問題発見・解決能力を高める	297
学生生活における時間管理や学習習慣を身につける	232
社会の構成員としての自覚・責任感・倫理観育成	218
大学内の教育資源（図書館を除く施設・設備・人員等）の活用方法	197
フィールドワークや調査実験の方法を身につける	174
自大学の歴史の学習、大学への帰属意識を高める	169
メンタルヘルス等、精神的、肉体的健康の保持	161

出典：文部科学省．大学における教育内容等の改革状況について（平成20年度）．

の学部（一部学科、全学機構）から回答を得たという。回収率は54.6%である。この河合塾が行なった調査の結果では、前述の文部科学省の調査結果で示された初年次教育の普及率は明らかにされていない。河合塾はこの調査の目的として、大学の教育力の差異を見極めることを挙げている。初年次教育を「大学の教育環境への適応のための取り組み」であると捉え、この初年次教育に大学側の入学者への対応が最も如実に表れるのではないかと考え調査を実施したという。調査はアンケートのみにとどまらず、条件に適した大学を訪問し、ヒアリング調査も行なわれている。この訪問ヒアリング調査では、A-Cのそれぞれ三つの評価視点から評価が行なわれている。

A：受動的な学びから能動的な学びへの転換、命題知の習得から実践知・活用知の習得への学び方の転換についての取り組みを評価

B：学生の自律・自立化の促進についての取り組みを評価

C：全学生に対する一定水準以上の初年次教育が保証されているかを測り評価

これら三つの評価視点においてグッドプラクティスと評価された中でも、ここではAの評価視点から見た大学での初年次教育の内容を見てみよう。

グッドプラクティスと評価された18の大学における初年次教育を見てみると、初年次教育の名称にそれぞれ工夫が凝らされていること分かる。また、人員の配置では教員のみならず、学生もかわり初年次教育が行なわれていることが読みとれる。展開方法にも各大学の特色が表れている。構成では、4つのプログラム（キャリアプランニング、基礎演習、学習技術、サービスマーケティング）から初年次教育を形づくり実施している大学もあることが見えてきた。位置づけとしては、人

表V-2 グッドプラクティスと評された初年次教育の内容(抜粋)

初年次教育の名称	基礎教養入門、学びの世界入門、初年次ゼミ、基礎ゼミ、基礎演習 新入生ゼミナール、修学基礎教育、ビジョンプランニングセミナー リサーチプロジェクト、4つのカスタートアップセミナー など
開講形式	通年（前期・後期）、必修
プログラム構成	複数のプログラムから構成
在学生の活用	他学年（2、3年）との合同、SAの配置、院生の配置 など
捉えかた	人間性涵養の場、技術プロ育成の場、人間関係構築の場、ホーム ルーム提供の場、専門基礎を学ぶ場、体験学習を通じて学びを動機 づける場、人間力、社会人基礎力養成の場、 など
ねらい	スタディスキルの習得、人間関係の構築、職業観を身につけさせる 卒業後のイメージをもたせる、生活面のフォロー など
内容	ノートテイク、授業のきき方、レポートの書き方などのスタディスキ ルを学ぶ、図書館の活用法を知る 学園祭に模擬店を出店し、グループワークと経営の基礎を学ぶ、プレ ゼンテーションを通してコミュニケーション・スキルを学ぶ 身近な学内問題から地域、社会問題に参画し改善計画を立てる ディベート、模擬裁判、判例研究を行なう など

注) Aの評価視点でグッドプラクティスと評価され事例が掲載されているのは18の大学学部である。

出典：河合塾編. 初年次教育でなぜ学生が成長するのか 全国大学調査からみえてきたこと.  
東京：東信堂；2010. pp. 40-67. を参考に作成。

間性涵養や人間関係、人間力を学ぶ場として捉えられている大学もあれば、ホームルームの場として、また技術者を育成する場などさまざまであることが分かる。次に、初年次教育の内容を詳しく見ていくと、大学での学びに求められるアカデミックスキルや、4年後を視野に入れて学生生活を設計するキャリアプランニングへの取り組みなど、一定の共通が見られる。一方で、初年次教育をユニバーサル化への対応のためのプログラムとは捉えず、法学の体系をいかに理解させるか、という視点から、専門教育の導入に取り組む大学もあることが分かった(表V-2)。

これらの大学における初年次教育の内容から明らかであるように、初年次教育は名称、位置づけ、展開方法、取りあげる内容それぞれ非常に多彩である。各大学ではそれぞれ大学の実情に応じて初年次教育の内容を組み立てていることが分かる。

### 3. 初年次教育における専門への導入教育をめぐって

河合塾の調査においてグッドプラクティスと評価された大学の取り組みの中に、専門教育の導入として初年次教育を捉えているものがいくつか見られた。この初年次教育における専門への導入教育は、初年次教育の類似概念(西垣他2008)として捉えられている。そもそも、導入教育は1991年の大学設置基準の大綱化を契機に多く用いられはじめたという(濱名・川嶋2009)。また、この導入教育が用いられる背景として、「導入」から卒業までの学習経路が明確であると同時に、中心は「専門」教育、という前提があると指摘されている。そこでは、「専門教育の習得」というゴールに向かってナビゲーションするという発想が強く、「導入」の後「発展」「展開」「完成」というステップが想定されるという。この導入教育と言う表現は、「専門教育の習得」が学士課程のゴールに位置づけられる、資格連動の学科分野において多用されるとも言われている(濱名2008)。しかし、この導入教育には補習教育も含まれることなどから、概念のあいまいさや多義性が否めないとの指摘もある。この後、大学のユニバーサル化に伴い、入学者の多様化がより進む

ことが予想される。大学初年次を専門教育への導入としてのみ捉えるのではなく、人生における新しい段階への移行に伴うさまざまな対応(濱名・川嶋2009)、として捉えるほうがふさわしいのではないかとの考えも示されている。

これらのことから、類似概念として捉えられてきた導入教育では、限定的な役割にとどまり、円滑な移行をはかり学士課程教育の基盤を成す初年次教育の代替には適さないといえるのではないだろうか。実際に濱名(2009)もユニバーサル化が進み多様な入学生が増えてくる日本の大学は、導入教育の発想で十分な対応といえるのだろうか<sup>7</sup>、と疑問を呈している。

初年次教育の捉えかたにこのように幅が見られるのは、初年次教育について十分な理解が得られていないことを表していると言えるだろう。先にも述べたように、初年次教育は学士課程教育における基盤にあたる。この重要性を強く認識した上で、初年次教育における専門への導入教育の扱いについて考えていく必要があるだろう。

## VI. 本学における初年次教育プログラム

本学の社会福祉学科では、2010年度より初年次教育の実施に乗り出した。名称は「基礎演習Ⅰ、Ⅱ」で、それぞれ前期と後期に分けて行なわれる。本節では、初年次教育の担当者の一人としてかかわった本学社会福祉学科における初年次教育プログラムを検証したい。併せて、筆者が担当したクラスにおいて展開した内容についても述べる。最後に、プログラムを基にした取り組み内容から見える課題を整理する。

### 1. プログラム作成過程

2010年度の実施を前に、初年次教育の教育プログラムを打ち立てるための具体的な作業が始まったのは、前年度の後半に入ってからではなかったか。プログラムの作成に際しては、初年次教育に関する数多くの先行研究の分析から、大学の3つの基本理念(地域とともに成長、生涯にわたって学べる、近隣諸国と学ぶ大学)、および5つの教育方針(表VI-1)を盛り込むことが確認された。併せて、専門職の養成にのみに特化した教育カリキュラムではない学科の特徴を踏まえるこ

とも念頭に入れ、初年次教育プログラムの作成が すすめられた。

表VI-1 九州看護福祉大学看護福祉大学 5つの教育理念

- 1 「こころ」豊かな人間性を培い、個性を尊重する精神を養う
- 2 患者並びにクライアントとコ・メディカルスペシャリストとの間の人間関係と信頼性を確保する
- 3 論理的・学際的思考力を育成し、適切、かつ、柔軟性に富んだ判断力と分析力を養う
- 4 国際的な幅広い視点に立ち、最新の情報収集と情報発信能力を培うとともに、国際感覚の習得と創造的・意欲的な活動力を育成する
- 5 保健・医療・福祉に関する最新の知識と技術水準を向上させる

出典： 大学ホームページより。http://www.kyushu-ns.ac.jp/about/idea.html

## 2. ねらいおよび基本方針

本学の社会福祉学科の初年次教育である「基礎演習Ⅰ、Ⅱ」のねらいは次の5点にある。

- ①初年次において、大学生活、大学環境等への適応性を高め、学問・研究や地域社会との交流を通じて、社会福祉の基礎を学ぶ
- ②「授業リテラシー」の獲得を目指す。身近な問題を扱う中で、社会福祉に関する視点や問題意識を培う
- ③教員や学生同士との間でコミュニケーション能力を高め、他者を理解し、自己を知ることを進め、専門職や福祉の実践家に必要なスキルに繋げる
- ④大学生活のために必要な学習・研究計画を立て、将来の専門職等への進路について考える場とする
- ⑤近隣諸国を中心に、他国の文化への理解力を培う

これら5点のねらいを基に、前期で行なう基礎演習Ⅰでは先ず、大学や大学生活への適応を高めることを基本方針とした。具体的な内容としては

表VI-2のように、アカデミックスキルの習得や対人関係づくり、学生生活の設計に取り組むことが盛り込まれた。

後期の基礎演習Ⅱでは、前期で培った環境への適応力や他者理解をその他の分野にも活用し、地域社会へ関心を広げたり、留学生と交流をしたりするなどし、実践を取り入れた内容を展開することが方針に据えられた。

これらのことから、本学の初年次教育である基礎演習は、アカデミックスキルを身につける以外に、専門への導入教育の一環として、社会福祉の基礎や福祉専門職としてのスキルの習得にも主眼が置かれていることが分かる。この点については、先にも述べた通り、十分な議論が必要であろう。また、大学の3つの基本理念や5つの教育理念を反映して、近隣諸外国の文化を理解することもねらいの一つに盛り込まれている。学士学位の国際的通用性を意識した上で、この文化を理解する能力(Cultural Competence)を育てていくことが求められていると言える。

表VI-2 基礎演習Ⅰ、Ⅱの内容

### 基礎演習Ⅰ

- 第1回：アイスブレイク
- 第2-4回：環境適応1~3
- 第5-6回：大学での学び①~② 学生生活の設計
- 第7-9回：大学での学び③~⑤ 学問領域の探索準備と探索
- 第10-12回：大学での学び⑥~⑧ 文献の講読
- 第13回：大学での学び⑨ 学生生活の設計
- 第14回：これまでの振り返りとキャリア形成について
- 第15回：評価シートで達成度を確認

---

## 基礎演習Ⅱ

---

第 1 回： 前期単位取得状況を確認、後期履修状況を把握してガイダンス

第 2-6 回：社会問題①～⑤

第 7-9 回：フィールドワーク事前準備①～③

第 10-11 回：フィールドワーク①～②

第 12-13 回：プレゼンテーション 準備を含む

第 14 回：専門教育への導入、キャリアの検討

第 15 回：振りかえり（学生生活の設計と学習の方向性、キャリア支援）

---

注）基礎演習Ⅰ、Ⅱそれぞれ週一回開講。

### 3. 取り組みの内容

上述の基本方針を踏まえて作成された内容に準じて、それぞれ担当の教員が各クラスの実情を踏まえながら展開してきた。一クラスは15~17名程度。男女比は均等ではなく、それぞれクラスにおいてばらつきが見られた。筆者が担当したクラスでは男子学生は1/3程度であった。

クラスの学生は当初、積極的に発言することもなく、消極的な姿勢で演習に臨んでいる学生が多く見られた。この状況を受けて、大学環境への円滑な移行を図ると同時に、受け身から自発的、積極的な姿勢への切り替えを促すことが必要ではないかと考えた。そこで、毎回の演習においてクラスのメンバーを指名して意見や考えを求め、時間内に全員が発言できるよう配分した。また、自分で考える時間を過ぎた後にグループに分かれ、グループ内でそれぞれ考えや意見を出し合う時間も設定した。これは毎回の演習において、自らの意見や考えを発信し、同時に他者の意見にも耳を傾け、異なる意見を尊重する大切さを学ぶことをねらいとして行なった。しかし、前期ではその効果はあまり見られなかった。グループ内での意見交換の際、グループをまとめ進行していく係りを選ぶのに時間をとられ、肝心の意見を交換する時間が十分に確保できないこともあった。基礎演習Ⅰ（前期）の内容は、この自発的、積極的な姿勢を引き出すことをベースに、アカデミックスキルの基本を身につけることや、4年後の将来を視野に入れて学生生活を計画することを主に行なった。アカデミックスキルについては、大学での学びノートテイク、レポート作成の際に必要な文献検索など基本的な事柄を中心に、着実な習得を目指した。キャリア形成ではまず、各自が目指

す方向性を明らかにすることからはじめ、それを実現するために大学生活において何をなすべきかを考えるよう促した。

後期からの基礎演習Ⅱでは、クラスに打ち解けて自発的に参加する学生が出始めクラスの雰囲気は前期に比べ明るさを増したように感じられた。この状況から、大学環境への移行はほぼ円滑に行なわれ、各自の自発的、積極的な姿勢が少しずつ現れはじめたと受け取ることができた。後期の演習では社会問題への関心を高めることが内容として設定されていた。そこで、まずは各自が社会のどのような分野に関心を持っているのかを明らかにするため、一週間分の関心のある新聞記事を持ち寄ることからはじめた。この取り組みから、各自それぞれに関心をもち、社会の動向をしっかりと見つけている様子が伝わってきた。また、時期的にチリ鉱山での落盤事故が報じられていたこともあり、国際動向に注目している学生も多く見られた。

筆者の担当したクラスでは、社会問題への理解を深めると同時に、それら社会的課題を解決するためにはどうすべきか、という視点も併せて持つよう促した。そこで、社会的課題を解決する一つの手法として、近年注目されているソーシャルビジネス（Social Business ; SB）を取りあげることにした。まずは、バングラデシュにおける貧困者の救済活動が評価され、ノーベル平和賞を受賞したムハマド・ユヌス（Muhammad Yunus）氏のSBへの考え方を学ぶことから始めた。次に、ユヌス氏が立ち上げた貧困者救済のための銀行「グラミン銀行」の活動について情報を提供した。その結果、基礎演習クラスでは、このSBやグラミン銀行について知っている学生はいなかった。また、社会の出来事への関心や問題意識を持つことには



理解が及んでも、それらを解決や改善へ導くための手法には、さほど強い関心を示してはいないようであった。このことから、問題や課題を見つけた後に、どのように解決に向かえばよいのか、といった解決に挑む視点も併せて教育を行なう必要があると考えられる。

基礎演習Ⅱの後半ではフィールドワークへの取り組みが盛り込まれていた。このフィールドワークでは、基礎演習のねらいの一つでもある地域社会との交流を通じての学びに重点を置いて取り組んだ。まずは学生の地域への関心を高めることを目標に、地域に視点を置いて地域の実情を学ぶよう促した。筆者のクラスでは、今日注目されている地域の国際化や多文化で構成される地域社会に焦点をあて、熊本県における多文化社会の実態を学ぶことからとりかかった。基本的な情報として、県全体の外国人登録者の人数や地域ごとの人数、国籍別に見た登録者数などを提供し、学生がこの現実をどのように捉えているのかを探った。すると、クラスの大半の学生が、地域のこれらの実情について把握していないことがわかった。そのため、さらに詳細に地域社会の国際化や多文化で構成される地域社会の実情を学ぶため、熊本市にある国際交流会館をフィールドに選び出向いた。参加した学生は、会館のスタッフの方々から提供された地域社会の様子に関心を示している様子が見て取れた。

基礎演習Ⅱの振り返りで、学生から寄せられた感想に、「最初は何をやるかよく分からなかったけれど、後半で日頃、目を向けていなかった地域の国際化などの社会的な課題へ取り組むことができてためになった」、と記しているのがあった。

前期・後期の基礎演習を振り返って、筆者のクラスにおける初年次教育は、ほぼ当初の目的を達成することができたのではないかと考えている。しかし、キャリア教育に関する取り組みについては、筆者自身、十分な情報提供ができたとは思えない。後に述べるように、学校教育において職業に関する教育の重要性を指摘する声は増している。この点を反省した上で、次年度以降の初年次教育に臨みたいと考えている。

## VII. 本学における初年次教育の課題

先にも述べたように、本学社会福祉学科の初年次教育への準備期間は、きわめて短かった。そのため、初年次教育を担当する教員間で意思形成が十分になされていなかった。初年次教育が始動した後の打ち合わせは、初年次教育に携わる教員が集まり、取り組む内容などを話し合うようにした。しかし、担当する教員の初年次教育への理解も一様でなく、教員間での議論も十分に行なわれてこなかったことから、取り組み初年度は、結果として足並みが揃う状態にはなかったと言える。

そこで、前年度のこのような状況を踏まえて、今後、初年次教育を展開していくに際し、主要な課題として以下の五点を挙げたい。

- ①学科において初年次教育のコンセンサスを形成する
- ②学士課程教育における初年次教育の意義を再検討する
- ③初年次教育における専門への導入教育の捉えかたを考える
- ④キャリア教育への認識を高める
- ⑤初年次教育の効果を分析する

第一に、学科内において初年次教育のコンセンサスを得ることである。そのためには、学科全体で初年次教育について議論を深める必要があるだろう。初年次教育の先行研究や、他大学における取り組みなどを詳細に分析し、FDなどの機会を通して発信し、相互に意見を交換しながら、初年次教育への理解を深めていくことが肝要であろう。

第二に、学士課程教育における初年次教育の意義を再び検討することである。前述のように、今日、学士課程教育は国際的通用性を強く意識して行なうことが求められている。初年次教育は学士課程教育の“第一歩”にあたると考えられることから、初年次教育プログラムにおいてどのように反映させていくかが鍵になるといえるだろう。

第三に、初年次教育での専門への導入教育についてである。先に挙げた調査結果から、他大学の初年次教育において専門への導入教育を取り入れている様子が見て取れた。本学においても同様に、初年次教育に専門への導入教育の視点が盛り込まれていることが上述の内容から明らかになっ

た。しかし学科内には、特徴のある本学の入試制度から、明確な目標を持たない、また社会福祉を学ぶ意欲や関心があまり高くない「不本意入学者」が存在している。この状況を踏まえた上で、専門への導入教育を再検討する必要があると考えられる。

第四に、キャリア教育への認識を高め取り組みを強化することである。大学を含めた学校におけるキャリア教育の在り方については2011年1月に中央教育審議会から答申が出されている。この答申では、若者の学校から社会・職業への移行が円滑に行なわれていない現状を改めるために、学校教育における職業に関する教育の重要性が指摘されている。今後、初年次教育においてこのキャリア教育をどのように盛り込んでいくのか、検討が必要であろう。

第五に、初年次教育の効果を分析することである。入学当初より、環境への適応を経てアカデミックスキルや人間関係の構築などを学んだ学生が、その後の大学生活においてこの初年次教育をどのように活用し、どれほどの効果が見られたのか、学びの連続性という視点から他の領域での初年次教育の影響を見極める必要があると考えられる。

以上の主要な課題へ取り組むことで、本学科において初年次教育への理解がより深まると同時に、初年次教育全体の質的向上が期待できると考えている。

## おわりに

本稿は次の二つの目的を有していた。第一に、学士課程教育における初年次教育の位置づけおよび役割、第二に、他大学の初年次教育への取り組みから、本学社会福祉学科での初年次教育の今後の方向性を探る手がかりを得ることである。

まずは、学士課程教育における初年次教育の位置づけと役割についてである。本稿での検証から、初年次教育は学士課程教育において、欠かすことができない重要な構成要素の一つ、という位置づけにあることが理解できる。また、初年次教育は学士課程教育における“第一歩”にあたり、その後の大学生活を成功に導き、国際的に通用する学士へとつなげていく重要な役割を担っているこ

とも併せて明らかになった。これらのことから、初年次教育は学士課程教育を充実させるための豊かな土壌を形成する重要な役割を有していると捉えることができるだろう。

次に、他大学における初年次教育への取り組みから、本学科の初年次教育の今後の方向性を探る手がかりを得ることについてである。他大学における初年次教育への取り組みを分析した結果、アカデミックスキルや環境への円滑な移行を支えるプログラムの展開など、共通の取り組みが見られることが明らかになった。その一方で、各大学においてそれぞれの実情や必要性に応じて、特色のある初年次教育が展開されていることも併せて読み取ることができた。これらを踏まえて、本大学の社会福祉学科における初年次教育の今後の方向性を考えるに際し、いくつかの課題について言及した。本学科における初年次教育の充実を図るには、このいくつかの課題への取り組みが鍵になるといえるだろう。

## 〔註釈〕

<sup>1</sup>大学等には、学部、短大、大学短大の通信教育、大学短大の別科、高等学校専攻科、特別支援学校高等部専攻科を含む。

<sup>2</sup>この部会では、学士課程、学士課程教育に関する指摘以外に、一般教育とリベラルアーツの違いや、大学教育の国際的通用性について議論が行なわれた。中央教育審議会(2003)。

<sup>3</sup>自立した21世紀型市民とは、専攻分野についての専門性を有するだけでなく、幅広い教養を身につけ、高い公共性・倫理性を保持しつつ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、あるいは社会を改善していく資質を有する人材を指す。中央教育審議会(2008)。

<sup>4</sup>「2008年答申」では、21世紀型市民として、また、国際的に通用する学士力を有した人材を育成するために、専攻分野にかかわらず学士課程に共通する指針が示されている。それによると、4分野に区分され、①多文化や異文化、人類の文化、社会と自然に関する知識を身につける ②コミュニケーション・スキルとして、日本語と特定の外国語を用いて、読み・書き・聞き・話す技術の習得 ③自らを律し、社会の規範やルールに従い、他者との協調の中で社会の発展のために行動する能力を育む ④発見した問題に対して、獲得した知識や技術を活用して解決できる力 などの知識や技術、それを活用できる能力を育む必要性が指摘されている。

<sup>5</sup>松原等(2006)は、罹患の有無に関わらず、能動的に全人的に生活適応ができる状態まで含めた健康尺度を用いて、大学生の不登校傾向の要因を分析する研究を行なっている。それによると、不規則な日常生活が精神的な健康度に大きく影響していることが指摘されている。

<sup>6</sup>川嶋(2009)は、人生における「移行」に伴う問題への対応としての捉え方以外に、①単に大学における専門教育への「導入」だけの問題としてとらえるのではなく、「断絶」した教育段階間の接続問題として、②「高校生から大学生」にいかに変身させるか、という大きな課題として捉えることの意義を強調している。濱名篤・川嶋太津夫. 初年次教育. 東京：丸善株式会社；2009. p.4.

<sup>7</sup>さらに、人文・社会科学系あたりの学部・学科では、不十分だと考えるほうが良いのではないだろうか、と述べている。濱名篤・川嶋太津夫(2009) 前掲書, p.247.

## 【参考文献】

- 松原達哉等. 大学生のメンタルヘルス尺度の作成と不登校傾向を規定する要因. 立正大学心理学研究所紀要, 2006；第4号：pp.1-61.
- 吉田文. 教養教育と一般教育の矛盾と乖離：大綱化以降の学士課程カリキュラムの改革. 高等教育ジャーナル, 2006；14：pp.21-28.
- 中央教育審議会. 学士課程教育の構築に向けて（答申）. 2008.
- 中央教育審議会大学分科会制度部会. 第8回 議事録・配布資料. 2008.
- 西垣順子等. 大阪市立大学における初年次教育・学士課程教育の検討について. 大阪市立大学 大学教育, 2008；第6巻第1号：pp.35-50.
- 山田礼子. 大学教育を科学する 学生の教育評価の国際比較. 東京：東信堂；2009.
- 河合塾編. 初年次教育でなぜ学生が成長するのか 全国大学調査からみえてきたこと. 東京：東信堂；2010.
- 濱名篤・川嶋太津夫. 初年次教育. 東京：丸善株式会社；2009.
- 中央教育審議会大学分科会. 東アジア地域を見据えたグローバル人材育成の考え方 ～質の保証を伴った大学間交流推進の重要性～. 2010.
- 東北大学高等教育開発推進センター編. 大学における「学びの転換」と学士課程教育の将来. 仙台：東北大学出版会；2010.
- 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室. 大学における教育内容等の改革状況について（平成20年度）. 2010.
- 熊野みき, 渋川瑠衣, 館野一宏. 本学[エリザベト音楽大学]における2009-2010年度の初年次教育の効果の比較. エリザベト音楽大学研究紀要, 2011；31：13-22.
- 中央教育審議会. 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）. 2011.
- その他

[ Original Paper ]

## Rethinking the role of the First-Year Experience in the Undergraduate Education

-What's the Bachelor Degree acceptable by international standards?-

Hitomi MADONO \*

### 【Abstract】

According to the results of "School Basic Survey" Ministry of Education fiscal year 2010, to the active service of the university advancement rate of high school graduates in March 2010 that 54.4 % was the highest in the past.

Undergraduate university enrollment rate to 50.9 %, up 0.7 points compared to the previous year. This ratio was also a record.

In parallel to such a high admission rate, sense of purpose and motivation for learning, diversification of normative consciousness in enrollment is progressing.

Today, with the goal of "supporting the transition from high school to university" (2010 Kawajuku) for these diverse students have been carried out First-Year Experience. In recent years, it is interest in higher.

It is said that more than 80% of universities and junior colleges across the country, have already adopted this First-Year Experience.

In this paper the basis of these circumstances, carried out the verification for the next two points to focus on First-Year Experience in University, were able to obtain certain results.

1. The significance and role of education in the First-Year Experience undergraduate education.
2. Analyzes the First-Year Experience in other universities, explore the way forward in our University department of social welfare.

As a result, I was able to clear from this paper, on that enrich undergraduate education, the First-Year Experience has been eye as one of the important components that cannot be essential.

In addition, I was able to clarify that it also plays an important role, connect to a Bachelor Degree acceptable by international standards.

Moreover, as a result of the First-Year Experience of other Universities to analyzer, can be seen some of the common efforts became clear. On the other hand, was able to see some efforts at many of Universities of each feature.

**Key words : Undergraduate education, First-Year Experience, Universalization of the university, Bachelor Degree acceptable by international standards**

---

\* Department of Social Welfare ; Associate Professor

Subject of study is social security of China, especially, persons with disabilities.